度肝を抜いた前衛芸術
「九州派」

往時のメンバー集う、果敢な活動記録を回想

一九六〇年前後、福岡を拠点に果敢な活動を展開した前衛美術グループ『九州派』のメンバーが、このほど“全員集合”、座談会を開き、熱狂の日々を回想するとともにその意味を確認し合った。これは、かつて同派のリーダーで今はパリに在住する往時の画家桜井孝身氏の帰国個展や、同じく菊畑茂久馬氏のオブジュデッサン展が、福岡市美術館で開かれているのを機会に、九州派の記録のあいまいさを正そうと相互に呼びかけて集まったものだ。同美術館の学芸員も参加して、地方から起こった珍しい前衛運動の証言を採録した。

最盛期は 30 余人

最盛期は三十余人を数え、九州派展の出品者は延べ五十人に達したというが、この日出席したのは、前記両氏のほか尾花成春、小幡英資、宮崎準之助、石橋泰幸、オチ・オサム、大山岩一、谷口利夫各氏ら、女性も田部光子、大黒愛子さんら。 菊畑氏が進行係として話題を進めたが、九州派の始まりは一九五六年秋、福岡県庁西側道りで開いた街頭展ペルソナ展が始まり。その暮れか翌年早々、九州派の名も生まれた。九州派の名の提案者は俣野衛氏であった。

集団に加わった大部分は一九三〇年ごろの生まれ。二科展や独立展に出品、落選した者が落選者大会を開いたのもきっかけとなった。入選経験者もいた。寺田健一郎、木下新、黒木陽二氏らだ。

“何でもアンチ”

うずうずした気持ちを胸に持つ美術志向の青年たちに、やがて反タブロー、反芸術を掲げる ネオ・ダダの思考や活動が伝えられ、何でもアンチの精神が九州派の根幹になった。既成の芸術はぶっつぶせ、アンチ団体展、アンチ県展であった。額縁入りの油絵は描かない。他人に審査される公募展には出品しないというのが基本線で、自ら体ごと表現するハプニングスや廃品などを材料としたオブジェが主作品となった。

東京都美術館で開かれていた読売アンデパンダン展が無審査ということで目標となった。土俗性あふれる九州派の出品作は、東京の人々の度肝を抜いた。「あまりに汚くゴミ同様ということで、管理上の意味から展示拒否される“作品”もあった。『主材料はコールタールやアスファルトで、真っ黒けに塗りたくり“ああ軍艦旗”などと題をつけて出品した』(石橋泰幸氏)。

東京に負けるな

一九五九年、東京・銀座画廊で九州派展を開いたり、同年から三年続きで福岡、北九州などで西日本アンデパンダン展を開いたりしたのが、九州派のピークだった。『東京に負けるな、絶えず九州派をアピールせよ』ということで、数人ずつが上京、 あちこちの画廊で連銷展をうったのもそのころ。『県展に出品する人たちに、そっちよりこっちの展覧会がいいよ、と言葉巧みに誘って西日本アンデパンダン展に出品させたりしたけど、だんだん九州派のスキャンダラスな悪名が高くなって、入る者はいなくなり、それだけ精鋭化して作品は過激になった』(桜井孝身氏)という。もっとも『内部抗争は日常で、いつもだれかとだれかがけんかし、腹を立ててやめたりまた入ったり、熱狂の歳月だったが、九州派はまさに渦巻き集団で、会長も代表者もいなかった』(菊畑茂久馬氏)。

一九六一年から六二年にかけて福岡新天町奥の中屋デパートや新天会館で九州派展を開いた。前者はオブジェ、後者はハプニングスが中心だった。六二年には同市百道海岸で『英雄たちの大行進』と呼ぶハプニング ・イベントを催した。いずれも一般の人をア然とさせる発表活動だったが、その常軌を逸した果敢さは東京の美術界でも話題になった。

60 年代で冷める

六〇年代に入って九州派運動は次第に冷めていく。メンバーの年齢によるそれぞれの生き方の選択も関係があるが、桜井氏の渡米など結束を緩める事情も重なった。やがて一九六七年、九州現代美術の動向展が企画されて、九州派は名前こそまだ残っていたが、実質的に命脈を断った。だが、その動向展をはじめ今日の美術展、アーチスト・ ユニオン展その他、地域的な美術運動が次々と組織さ

れたがその中核となったのは九州派の挑戦的な伝統であり、またその情神を伝えるメンバーたちでもあった。美術雑誌などが相次ぎまとめる戦後美術史でも、いくぶん伝説めいた扱いでユーモラスな活動ぶりを記録している。

『自分でも不可解な青春の熱狂の中にいたが、狂わされたという気はない。悔いのない熱狂だった』(小幡英資氏)『九州派がいなかったら戦後福岡の美術はまるで味気ないだろう』(オチ・オサム氏)。しかし、メンバーはほとんど五十歳に近づ き、あるいは超している。タブローに帰った画家も多い。美術に年齢はないというが九州派の情熱を復元し、再び前衛の火を燃やすことができるか、ただ過去の回想として記録の中に眠るか、前向きの会話はもはや生まれなかった。(谷口編集委員)